

2019年度学習院大学史学会総会
第35回 学習院大学史学会大会

プログラム
大会講演要旨
研究報告要旨

日時：2019年6月15日（土） 9：00～20：00

会場：学習院創立百周年記念会館 3階

主催：学習院大学史学会 共催：学習院大学文学会

【目次】

プログラム	2 頁
講演者紹介	4 頁
大会講演要旨	8 頁
研究報告者紹介	10 頁
研究報告要旨	12 頁
学習院大学史学会概要	18 頁
『学習院史学』第 58 号原稿募集のお知らせ	19 頁

【プログラム】

◆2019年度学習院大学史学会総会（9：00～10：50）

於 学習院創立百周年記念会館3階 小講堂

開会挨拶

2018年度事業報告

2018年度決算報告

2018年度会計監査報告

2019年度委員長選出

2019年度委員委嘱

2019年度事業方針案

2019年度予算案

その他の議題

閉会挨拶

◆研究報告（11：00～15：10）

於 学習院創立百周年記念会館3階 第1・3会議室

《第一部》 11：00～12：00

【第1会議室】

「ローマ皇帝礼拝—地方都市におけるアウグストゥスの
ゲニウス、ヌーメン礼拝を中心に—」

大河 歩菜美 氏（学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程）

【第3会議室】

「20世紀初頭南洋における中国民衆宗教の展開—同善社を事例に—」

小武海 櫻子 氏（学習院大学文学部史学科助教）

《第二部》 13：00～14：00

【第1会議室】

「始皇帝像の変遷—史学史からの一視座—」

段 宇 氏（学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程）

【第3会議室】

「川崎市における都市行政の成立と展開
：1920～50年代の住宅政策を手掛かりに」

北川 恵海 氏（川崎市公文書館非常勤嘱託員）

≪第三部≫ 14：10～15：10

【第1会議室】

「九世紀の陰陽頭について」

那須 香織 氏（学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程修了）

【第3会議室】

「フランスの大西洋貿易と後背地の変容
ーラングドックの地域経済と食糧問題」

空 由佳子 氏（日本学術振興会特別研究員）

◆大会講演（15：30～17：45）

於 学習院創立百周年記念会館 3階 小講堂

* 学習院大学文学会共催

「中国古代美術の海外流出」

15：30～16：30

鶴間 和幸 氏（学習院大学文学部史学科教授）

「18世紀の緩やかな変化

ー束縛からの解放と日常化するリスクー」

16：45～17：45

浪川 健治 氏（筑波大学名誉教授）

◆懇親会（18：00～20：00）

於 学習院創立百周年記念会館 3階 第1～3会議室

【懇親会費】

* 学内学部生：無 料

* 史学会会員：500 円

* 一 般：1,000 円

【講演者紹介】

つるま かずゆき
鶴間 和幸 氏

【経歴】

1950年、東京都生まれ。1974年、東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。1980年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1998年に「秦帝国の形成と地域」で博士(文学)を取得。中国社会科学院歴史研究所外国人研究員、茨城大学教養部助教授、同教授などを経て、1996年より学習院大学文学部史学科に着任。現在に至る。

【主要著書】

- 『秦漢帝国へのアプローチ』山川出版社、1996年
- 『始皇帝の地下帝国』講談社、2001年
- 『秦の始皇帝－伝説と史実のはざま』吉川弘文館、2001年
- 『始皇帝陵と兵馬俑』講談社学術文庫、2004年
- 『ファーストエンペラーの遺産 秦漢帝国』講談社、2004年
- 『秦帝国の形成と地域』汲古書院、2013年
- 『人間・始皇帝』岩波書店、2015年

【共編著】

- 『岩波講座世界歴史 3 中華の形成と東方世界』岩波書店、2000年
- 『四大文明 中国』NHK出版、2000年
- 『世界歴史大系中国史 1』山川出版社、2003年
- 『辺境から中華へ―帝国秦への道―秦の始皇帝と兵馬俑展』共同通信社、2004年
- 『よみがえる四川文明』共同通信社、2004年
- 『大兵馬俑展』産経新聞社、2005年
- 『中国世界遺産の旅 2 中原とシルクロード』講談社、2006年
- 『世界歴史の旅 中国古代文明』山川出版社、2006年
- 『始皇帝と彩色兵馬俑展 司馬遷『史記』の世界』TBS、2007年
- 『黄河下流域の歴史と環境』東方書店、2010年
- 『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』東方書店、2013年
- 『東アジア海文明の歴史と環境』東方書店、2013年
- 『宇宙と地下からのメッセージ～秦始皇帝陵とその自然環境』D-CODE、2013年

【翻訳】

- 蘇曉康編 『黄河文明への挽歌－「河殤」と「河殤」論』学生社、1990年

【主要論文】（2000 年以降）

「文明と自然と歴史学－中国古代史へのアプローチ」

（学習院大学史学科編『歴史遊学－史料を読む』山川出版社、2001 年）

「王権と農業支配－古代中国」

（『岩波講座 天皇と王権を考える』第 3 巻、岩波書店、2002 年）

「漢と西域とローマ」（『文明の道 3 海と陸のシルクロード』NHK 出版、2003 年）

「歴史の風 中国史の古代と現代」（『史学雑誌』第 113 編第 11 号、2004 年）

「地下からの贈り物－簡牘資料の価値と研究状況（3）始皇帝の時代の新出土資料

－ 睡虎地秦簡・龍崗秦簡・里耶秦牘 －」（『東方』第 277 号、2004 年）

「秦始皇帝研究の最前線」（『史鏡』第 52 号、2006 年）

「秦都咸陽與秦始皇陵」

（『一統天下：秦始皇帝の永恒国度国際学術研究会論文集』香港歴史博物館、2012 年）

「東アジア海文明と環境への認識」（『東アジア海文明の歴史と環境』東方書店、2013 年）

「秦帝国の水利と自然」（『中国 2 1 中国水利史』東方書店、2013 年）

なみかわ けんじ
浪川 健治 氏

【経歴】

1953年、東京都生まれ。1976年、弘前大学人文学部文学科卒業。1978年、東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2004年、「近世北奥社会の変容と民衆移動」で博士（文学）を取得。鴻巣市史編纂室、筑波大学大学院人文科学研究科（歴史・人類学専攻）助教授、同大学院人文社会系（歴史・人類学専攻）教授などを経て、現在筑波大学名誉教授。

【主要著書】

『近世日本と北方社会』三省堂、1992年
『アイヌ民族の軌跡』山川出版社、2004年
『近世北奥社会と民衆』吉川弘文館、2005年

【共編著】

『街道の日本史 4 下北・渡島と津軽海峡』吉川弘文館、2001年
『近世武士の生活と意識「添田儀左衛門日記」一天和期の江戸と弘前―』
岩田書院、2004年
『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ―多文化の歴史学と地域史―』
岩田書院、2005年
『北方社会史の視座 2 歴史・文化・生活』清文堂、2008年
『地域ネットワークと社会変容―創造される歴史像―』岩田書院、2008年
『近世の空間構造と支配―盛岡藩にみる地方知行制の世界―』東洋書院、2009年
『周辺史から全体史へ―地域と文化―』清文堂、2009年
『グローバル化のなかの日本史像―「長期の一九世紀」を生きた地域―』
岩田書院、2013年
『近世日本の言説と「知」―地域社会の変容をめぐる思想と意識―』清文堂、2013年
『別冊環③ 江戸―明治 連続する歴史』藤原書店、2018年
『青森県史 通史編 2 近世』青森県、2018年
『明君の時代―十八世紀中期～十九世紀の藩主と藩政』清文堂、2019年

【主要論文】（2010年以降）

「幕末における芸能諸集団と『差異』化の論理」（『人民の歴史学』第185号、2010年）
「『津軽之喜太夫』考―元禄～享保期における弘前藩領の歌舞伎集団と自己認識―」（『弘前大学國史研究』第129号、2010年）

「列島の食文化ーサケをめぐる文化ー」
(『食文化ー歴史と民族の饗宴 [シンポジオン] ー』、悠書館、2010年)
「『国有林史料』が切り開く新しい地域史」(『農業史研究』第44号、2010年)
「近代移行期の民衆と地域移動」
(明治維新史学会編『講座明治維新』第2巻、「幕末政治と社会変動」、2011年)
「幕末における芸能興行とその受容ー弘前藩領をめぐる動向と娯楽享受ー」
(『歴史人類』第39号、2011年)
「松前藩の成立と北方世界」
(『日本の対外関係5 地球的世界の成立』吉川弘文館、2013年)
「一八世紀〈変容する地域と民衆移動〉ー盛岡藩『宗門人別目録』をてがかりにー」
(『歴史』第120輯、2013年)
「不作忌避の禁忌と豊穰祈念ー『長期の19世紀』における社会意識の系譜ー」
(『米沢史学』第31号、2015年)
「『天気不勝』と自然の回復ー天明飢饉後の豊穰祈念と除災の発源ー」
(『弘前大学國史研究』第146号、2019年)
「自然と政治の imbalanceー『天気不勝』と『死罪除日』ー」
(『歴史』第132輯、2019年)

【大会講演要旨】

「中国古代美術の海外流出」

鶴間 和幸 (学習院大学文学部史学科教授)

昨年度は大学の長期研修の年に当たり、「中国古代考古美術資料の調査と研究」をテーマに、中国古代美術の伝世遺物と考古出土遺物がどのように海外へ流出してきたかの実態を探る調査を行った。中国古代の青銅器や玉器などは世界各地に流出しているために、歴史の資料として有効に活用するにはとくに出土地を確定する作業が必要である。ところが、流出遺物の多くは盗掘されたものが多く、確定することが難しい。そこで流出品のなかに寄贈・購入年、出土年、出土地などの情報のあるものに注目し、出土情報のないものについては、出土した類似品と照合することによって出土地を推測することができる。私たちは、中国古代史研究のなかで既存文献史料のほかに考古資料を活用してきたが、それは発掘されたものが大部分である。しかし欧米や日本の博物館には出土地情報はないが、いわゆる美術品としては一級品が数多く見られる。「美しい」「精巧である」という製作技術面での評価と、「歴史的に価値がある」という評価とは、必ずしも一致はしない。流出文物の出土地を推測確定していく作業は、一本の糸をたぐり寄せる一種の謎解きのようなものでもある。

2018年6月に中国安徽博物院において古代青銅器の流出経路が明らかな出土遺物の事例を知ることができた。8月には大英博物館、ヴィクトリア・アルバート博物館、オックスフォード大学アシュモレアン美術考古学博物館、10月にはパリの国立ギメ東洋美術館、セルヌスキ美術館、12月には北京の故宫博物院、中国国家博物館、保利芸術博物館、2019年3月にはドイツのケルン東アジア芸術博物館などを訪れた。国内では根津美術館、東京国立博物館、NIHO ミュージアムを訪れた。

文物の流出時期を①19世紀後半のアロー号戦争(1856)後②20世紀初頭義和団事件(1900~01)後③辛亥革命(1911)後の1910年代④1920~30年代の考古発掘草創期⑤日中戦争時期(1937~1945)に分けて個々の事例を取り上げて紹介していきたい。

そもそも流出文物に関心をもつきっかけになったのは、岡倉天心(1863~1913)の弟子であった木村武山(1876~1942)の中国美術コレクションに接する機会があったからである。文物の真偽の判定の難しさを体験しながら、岡倉天心、早崎稔吉(1874~1956)、木村武山、寺内寿一(1879~1946)らが中国美術にどのようにかかわったのかを知ることができた。

「18世紀の緩やかな変化—束縛からの解放と日常化するリスク—」

浪川 健治（筑波大学名誉教授）

18世紀中期、弘前藩領では「仮子^{かりこ}」と呼ばれる農業奉公人は高賃金を求めて雇用主を変え、また他領持も増大した。農村に滞留しなかった彼らが果たした歴史的な意味を、その存在と行動に探り、そうした社会がもったリスクとは何であったかを考える。

1. 低迷する米価、高騰する給銭

(1)「日暮之竈立^{かまどだて}」層の成立—経営維持のための分家—

18世紀中期という時期、北奥という地域で、「必竟近年米直段安ク、手間賃高ク候」という条件のもとで分家は何を意味したのか。

(2)庄屋・大庄屋・代官の現実認識

分家が生み出す、農業に従事せず「小家を造り、或は借宅」して賃稼ぎや小商売に従事する層を生む「日暮之竈立」の成立がもつ危機はどのように認識されていたのか。

(3)「商品」化する労働力としての「仮子」—賃労働者化する農業奉公人—

18世紀以降、より高賃金を求めて一定の経済的余裕を獲得した「仮子」らは、やがて労働そのものからの解放、具体的には制約される時間からの解放—余暇を希求する。

2. 「我尽・気随之勤方」の行き先—束縛された時間と空間からの解放—

(1)社会問題化する「松前持」

他領持は弘前藩領での貧窮化の結果として現れるのではなく、先行してそれを含めて成り立つ生業を営む地域があり、内陸からの他領持はそれに引きつけられて行われる。

(2)なぜ、「松前持」なのか—秋田沼田村左之助一件—

松前持は、閉塞した村方の状況から離脱し、異なる生産と生活の場として選択することで、藩による非日常への制約からも束縛されない新たな空間への脱出でもあった。

3. 流動化する社会と日常からの解放—余暇への希求—

(1)余暇の獲得—増加する「休日」—

「定休日」を起点に労働ピーク後の休養時間を増加させ、祝祭など村落での共通の儀礼行為や慣行に合わせて休日の移動や長期化を図り、祝祭や遊興の時間を獲得する。

(2)我が尽な休日—境堰村騒動一件—

藩による「猥ニ休足」することの取り締まり、「御定」の休日のなかに領民を束縛する動きと、それへの直接的な抵抗と抑圧を考える。

おわりに—天明飢饉 隣り合わせのリスク—

米下直のもとでの仮子給銭の上昇と、それによって成り立つ賃労働者化した農村奉公人という生活が孕むリスクは何か。仮子給銭と米価の相関関係から考える。

【研究報告者紹介】（報告順に掲載）

大河 歩菜美（おおかわ・ほなみ） 学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程
帝政期ローマにおける皇帝礼拝の諸相について研究している。帝政期ローマにおける皇帝
礼拝の姿は実に多種多様であり、礼拝設立の主体も礼拝の持つ意義も一様でなかったと考
えられる。一昨年度まではイタリアの地方都市を中心に、最近では死後神格化された皇帝
Divus の礼拝や西部属州における皇帝礼拝について個別かつ具体的に検討することで『ロー
マ皇帝礼拝』の実態を明らかにしていくことを試みている。

小武海 櫻子（こむかい・さくらこ） 学習院大学文学部史学科助教
近代中国における民衆宗教や新興宗教結社などについて研究している。これまでは同善
社を中心事例として、同団体の国学教育や慈善事業、さらには災害観からみる救世思想な
どについての研究論文を発表してきた。本大会においては、同団体を事例にした 20 世紀初
頭南洋における民衆宗教の展開について考察する。

段 宇（だん・う） 学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程
東アジア文化圏における始皇帝の人物像について、これを信じ受け入れる社会的状況の特
質、およびこれを信じられ受け入れられることで形成した社会的状況に注目して、歴史的
な研究を行っている。特に宋代における士大夫政治の実態を手掛かりにして、権力と歴史
叙述との関係を明らかにしたいと考えている。

北川 恵海（きたがわ・えみ） 川崎市公文書館非常勤嘱託員
戦間期から高度成長期にかけての都市行政について、川崎市を事例として研究している。
特に水道行政や住宅政策の展開過程などを通じて、総力戦体制下における県市関係や 市行
政の役割について考察する。また関心の所在は地域行政の担い手の変遷にあり、都市行政
の複雑化や広域化に伴って、地域行政が旧来の名望家層の手を離れ、専門的な知見を有す
る技術系吏員へと移行する様子について人的レベルから分析することを試みる。

那須 香織（なす・かおり）

学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士前期課程修了

古代の陰陽寮について関心を持ち、特に九世紀における陰陽寮を取り上げる。専門技能による奉仕を求められる陰陽博士らの律令制下における活動基盤を理解することを目的とし、同時期の陰陽道を学ぶ様子や寮内人事から、陰陽寮内の人材の変遷を分析することや、陰陽道にまつわる編纂の記録が残る滋岳川人を取り上げてきた。

空 由佳子（そら・ゆかこ）

日本学術振興会特別研究員

近代フランスを中心に、コミュニティの形成と自治について、宗教文化、自然と経済、人々の社会関係から研究している。教会、市場、食糧供給、貧民救済といった近世共同体の機能を通して、各地域の特殊性について理解を深めると同時に、都市と農村、大西洋地域と地中海地域、フランスと植民地など、多様な諸地域を比較し、関連づけて考察している。

【研究報告要旨】（報告順に掲載）

「ローマ皇帝礼拝—地方都市におけるアウグストゥスの

ゲニウス、ヌーメン礼拝を中心に—」

大河 歩菜美

歴史上の多くの国家において、政治的主権者が絶対視され、神聖視された現象が知られているが、帝政期ローマにおいてもその現象が認められ、一般に「皇帝礼拝 Emperor Worship」と呼ばれている。多くの場面で殆ど特別のことわりなしに、この言葉は皇帝を宗教的に権威付ける政策として、単一的に用いられているが、しばしば先行研究において「“the imperial worship”が存在したのでなく、極めて多様な礼拝の数々が存在したのであって、それを現代の学者が便宜上“the worship of emperors”と呼んでいるだけである」などと指摘されるように、報告者は実際のローマ皇帝礼拝確立の過程および内容はそれほど簡単ではないと考える。そこで、本報告ではイタリアの地方都市における存命中の初代皇帝アウグストゥスに対する礼拝を議論の中心に据えつつ、死後神とされた皇帝に対する礼拝をも取り上げることで、「ローマ皇帝礼拝」概念の有効性を検証していく。

報告では、まずイタリアの地方都市における皇帝礼拝の実態を明らかにする。従来の皇帝礼拝に関する定説では、ローマ市やローマ市民の居住するイタリアの地方都市における存命中の皇帝に対する直接的な礼拝は避けられ、死後に神格化されて礼拝を受ける他、そのゲニウス（守護神）やヌーメン（神性）などを介して間接的に礼拝を受けていたとされてきた。ところが、ローマ市以外のイタリア諸都市で金石文史料より初代皇帝アウグストゥスの生前から彼のために捧げられた神殿・祭壇や祭司・神官職の存在が確認されている。それらについては、皇帝を神とした礼拝を行っていたのではなく、実際は彼のゲニウスが礼拝対象であったと言うのが定説であったが、近年では史料を文字通りに解釈して、既にアウグストゥスの生前において帝国内の全ての都市での彼に対する礼拝は彼を神同然に扱うものであったとの異論が述べられている。ここで、報告者は古典文学史料や金石文史料を用いて、当該地域ではアウグストゥスのゲニウスやヌーメン礼拝も確かに存在していたが、同時に彼自身に直接的に捧げられていた礼拝も存在していたことを主張する。その際には、アウグストゥス時代の地方都市における皇帝礼拝創設のイニシアティブは、都市内での政治的社会的優位を期待した都市の有力家門の手に特にあり、彼らは自ら選んだ形式で自由に各々の皇帝礼拝を創設することが出来たこと、また、礼拝の際のアウグストゥスの礼拝に対する態度は常に受動的なものであって、ここでの皇帝礼拝は政治的宗教的な皇帝のイデオロギーを反映するものではなかったことも明らかにしていく。

次に、イタリアの地方都市とは異なる様相を示す、死後に神とされた皇帝たちの礼拝を取り上げる。紀元後 14 年、アウグストゥスが死ぬと元老院決議によって彼は神格化され、「神なるアウグストゥス」という名で国家神に列せられ、それは以後範例となったが、ここでは、皇帝礼拝が「下から」導入された地方都市に対して、神なる皇帝の礼拝がどのレベルにおいても共通して皇帝の意志が反映された「上から」導入あるいは統制された礼拝であったことを確認する。

結論的としては、ローマ皇帝礼拝という単一の制度は存在せず、礼拝設立の主体や地方が異なるに応じて実に多種多様な形態をとっていたことを主張する。

「20世紀初頭南洋における中国民衆宗教の展開—同善社を事例に」

小武海 櫻子

20世紀初頭、東アジアにおいて地域を越えて融合してゆく中国民衆宗教は、暴力的な戦争と災害のつづく歴史的状況のなかでむしろ活発化し、慈善事業による人心と世界の救済が目指されることが知られている。同善社もまた、伝統的な中国民間教派（青蓮教）の系譜を受け継ぎつつ、知識人や軍人・地方官員らに支持され、教義や位階制度をもつ宗教慈善的組織として中国各地に普及していった。

ただし、これまで同善社を含む「先天大道」の系譜をもつ民間教派の大陸中国から南洋諸地域へ接続してゆく歴史については、史料の制約もあって、必ずしも全面的に明らかにはされてこなかった。多元的な族群社会と植民地統治という本土中国とは異なる歴史状況と民間教派との結びつきを検討することで、大陸から継承され／あるいは変容してゆく教派の枠組みをより顕著に見出すことができよう。そうであれば、他の善堂や扶鸞系結社と共有してきた「扶鸞善書運動」の潮流を前に、同善社が南洋においていかなる形で展開したのかを明らかにすることは、19世紀から現れる「先天大道」の系譜の歴史的意義を見直す一助となるだろう。

以上の問題意識に基づいて、本報告では、20世紀初頭のシンガポールを中心に展開する同善社の活動について検討する。1928年に広東梅州の客家でシンガポールの同善社を開辦した蔡飛という信徒の著述を中心に分析し、1980年代までシンガポールにおいて同善社が孔教会と協同したこと、四川儒壇の著した経巻によって説かれた『中外普度経』が孔教会の教説に近接する五教合一論と合致して海外布教の説得力となったこと、シンガポール同善社を本拠地として、マレーシア・タイ・インドネシアへの展開が主に広東・福建幫間のネットワークの争奪と関わっていたことを明らかにする。

秦の始皇帝は紀元前 221 年に東方大平原の初統一を果たした歴史上の重要な人物である。周知の通り、始皇帝は二千年間にわたる専制君主制度を確立し、東アジア文明圏の成立に多大な影響を与えた明君としての姿と、ローマ帝国のネロの様に多くの民を苦しめた非道な暴君としての姿で語られてきた。

周知の通り、始皇帝の生涯は紀元前 1 世紀ごろ活躍していた歴史家の司馬遷に詳しく記録された。『史記・秦始皇本紀第六』をはじめとして、関連する記事は秦の史書にあたる「秦記」を中心に、秦代の詔勅文や刻石文を参考して作成したのである。

『史記』だけではなく、後世に成立した史料のなかで、始皇帝に関わる論述は豊富である。本報告は現存する文献史料のなかで秦の始皇帝に関する言説を抽出し、始皇帝像に堆積する累重的時代像の層序を明らかにし、または創作と受容の二つの側面から秦始皇帝像に関する歴史知識が変容する実態に迫り、各時代において歴史言説の空間を論ずるものである。また、通時的に始皇帝評価の様相をさぐって、歴史上の学問を徹底的に整理することは、むしろ後世の脚色を排除し、その人物の実態に迫るために有効でもある。つまり、以下の史実を挙げ、歴史物語における虚構性を手掛かりにして、歴代に成立した歴史叙述の時代性を再考する研究である。

したがって、現存する漢代史料を利用し、『史記』が成立した際に歴史言説が制限される実態を分析し、歴史言説と政治との相互作用を明らかにする試みが有意義である。考察の射程を伸ばし、唐五代時期までの始皇帝像の時代的特徴を検討していくと、家法及び師法を重んじた学風の影響で、知識人は「記憶の共同体」にならず、始皇帝の歴史像には一定の見解にならざるのがわかる。また、この時期には史部文献が比較的軽視されることで、始皇帝像は伝説に影響される性格が鮮明である。

宋遼金時期において科挙試験が国家の体制再生産の鍵とされ、科挙を中心にした社会は再編された。貴族政治の下に家族単位で学説を継承する現象が打破され、選抜の公平さを確保するには共通な歴史像の形成が前提とした。「史記の学」がこの時期に発達し、司馬遷が著した『史記』に描かれた始皇帝像はこれによって正統的にされ、民衆の間に広まった。それに、北宋の真宗皇帝によって対遼宣伝戦略の一環とされてきた秦の正統観念批判の影響も深遠であった。

さらに科挙が廃止された時期の始皇帝像を考えると、明治維新に当たる時期の論説と新聞記事を手掛かりにして、日本において英雄待望論の沸き上がるのと同時に、始皇帝像が英雄として再編された気運が高まって、近代中国へ波及したことが確認できる。日中の間の思想的対話する情状を分析し、この動きを文化大革命まで一線を引くことで「儒法論争」の思想的えん源を解明できると思う。

秦始皇帝像は千年ごとに一回の大きな変化があり、過失によって亡国した君主から知識人を弾圧する異民族の暴君に転回した後、天才をふるって中華への道を拓く革命家として

再発見されたことがある。始皇帝像を軸にする史学史的な研究を通じて、歴史叙述の時代性を釈明し、文化的時代区分論を明らかにしたい。

「川崎市における都市行政の成立と展開：1920～50年代の住宅政策を手掛かりに」

北川 恵海

本報告は20世紀前半の川崎市を事例に、都市行政、とりわけ住宅政策について、市役所機構の成立と展開の過程に即して論じるものである。川崎市では、20世紀初頭から工業化が急速に進展し、人口の急増に伴って都市計画や社会事業といった都市行政の確立が求められた。大都市では1920年代頃から、都市行政を専門とする技術系官僚が市政において重要な役割を果たすようになっており、これに関しては1990年代から「都市専門官僚制」論として盛んに議論がなされ、大阪市や東京市、横浜市などを事例とした大都市における地域政治の研究が大きく進展した。しかし、地方都市においてもこの議論が適用され得るのか、またそもそも「都市専門官僚制」の実態はいかなるものであったかといった課題が残されている。

そこで、本報告では地方都市における都市行政の形成過程を検討すべく、川崎市役所内において都市行政を担い得る人材が成長していく過程を人的レベルから分析することで、都市近郊における地域行政の都市化・専門化の様相を明らかにすることを試みる。川崎市では、1900～20年代の都市問題の出現期には専門的な人材が乏しく、地域レベルでの対応が難しかったことから、県の「都市専門官僚」主導のもとで都市計画や社会政策が展開された。しかし、日中戦争が始まり軍需工場が内陸部にも進出する1930年代後半から40年代前半になると、市が都市計画や住宅供給を主導するようになる。その背景には、川崎市における技術系吏員（＝「地域的テクノクラート」）が都市専門官僚的な性格を持つ県の技術者らと交流を持ちつつ、都市計画や住宅政策の策定過程を通じて成熟していったことが挙げられる。その結果、1939年には全国に先駆けて市と会社による住宅供給会社が設立された。また、彼らは住宅営団の労務者向け集団住宅地造成事業にも積極的に関与し、市内古市場地区に営団最大規模の住宅地を形成するに至った。この古市場住宅の大きな特徴は、市の要望に沿って公園や緑地、公衆浴場、学校、保育所などの都市装置が計画的に配置され、終戦や住宅営団の廃止を挟みつつも当初の計画通りに事業が遂行された点である。

さらに終戦後の様子に目を向けると、戦災復興を担当した川崎市役所の復興部・建設部で部長・課長クラスを務めた人物の6割以上が土木系の専門学校を卒業しており、また少なくとも8割以上が戦前期から土木課等で勤務していたことが確認される。つまり、川崎市の戦後復興を担ったのは、総力戦体制期に成長していた「地域的テクノクラート」であったといえよう。

古代陰陽道における主幹たる組織・陰陽寮は、律令に基づき組織されている。陰陽寮を構成する官職は、四等官（頭・助・允・大／少属）、陰陽・天文・暦の諸道博士や学生および陰陽師をはじめとした専門技能による奉仕者を中心に構成される。この組織の構造を理解する際に、先行研究ではしばしば前者を「事務官人」と、後者を「技能官人」と大別することがあり、一定数支持されている。専門技能による奉仕を求められる「技能官人」は、その職能の都合、専門技能を有する人材の安定した輩出が問題となる。その中で、諸道の修学者の確保とそのための体制の形成に焦点が当てられる。

一方で「事務官人」とも解される四等官についても、諸道との関係を考慮する必要がある。特に陰陽頭は任用された人材を検討すると、九世紀を通してその素質の変化をうかがうことができる。当初は官人に諸道への知識を明確に求めていたわけではない。しかしながら、九世紀中ごろになると陰陽寮にかかわる諸道の知識に通ずる人物が登用されていく傾向を確認でき、博士職との兼官や陰陽師経験者の任用が認められる。これにより、陰陽頭は「事務官人」と目される一方で、関係諸道への知識を有する人物が登用され、結果的に「技能官人」輩出を目的の一つとして育成された人材と共通する能力が求められることになったといえるだろう。

陰陽道の成立については時期や成立したとみなす要素を含め諸説存在し、また典型となる陰陽道の在り方として平安時代の陰陽道を想定することへの批判もある。そのような中、八世紀から九世紀前期にはある程度の技術の体系化がすすみ、かつ陰陽道の要素を陰陽寮内で主要な職掌として備えたことを指摘する論考が挙げられた。（細井浩志「陰陽道の成立についての試論—呪禁師との関係と「初期陰陽道」概念について—」）

拙稿「滋岳川人の登場と九世紀の陰陽寮」では滋岳川人の著書編纂を陰陽寮全体の技術体系としての成熟の成果と評し、またその兆候を九世紀前～中期にみえる陰陽寮内の四等官と博士職の昇進、および陰陽寮内の各官職同士の兼官の確認から論じ、加えて同時期の陰陽寮内の人事を理解する手立ての一つとして官職制の問題全体の中で論じる必要を述べた。

陰陽道の成立を技術の体系化として解することには先行研究の指摘に首肯するところである。ただし、諸要素を陰陽寮の官職の職能が吸収することにより、陰陽道の成立とみなすのであれば、技術保持者を登用するようになる陰陽頭の職能もまた、陰陽道成立・変遷にかかわる問題となるだろう。「事務官人」と「技能官人」の大別で陰陽寮の構造を理解するにあたり、両者の人材供出の源となる技能保有者集団との関係に加え、陰陽寮を太政官の中でどのように解釈するかを検討が必要である。

「フランスの大西洋貿易と後背地の変容ーラングドックの地域経済と食糧問題」

空 由佳子

17・18世紀のフランスは、北アメリカとカリブ海を中心に「植民地帝国」を築き、イギリスと覇を競う列強に成長する。大西洋規模の分業体制が成立し、ボルドーやマルセイユといった海港都市が大西洋貿易で急成長を遂げる一方で、アメリカ植民地とフランスの後背地の一部では輸出産業が活発化する。しかし、繁栄の陰では、貧富の格差が拡大し、不作は食糧危機を何度も引き起していた。このような社会情勢のなかで、食糧問題の解決は、統治上の主要な課題となる。

本発表は、大西洋貿易の全盛期のフランスにおける経済と統治のあり方を、南フランスのラングドック地方の地域経済と穀物流通を通して捉えなおすことを目的とする。フランス国際商業史研究は、大西洋側の海港都市の活動に集中し、世界経済が内陸に与えた影響や、地中海商業圏の活動には十分に関心が向けられてこなかった。そこで、世界貿易港ボルドーとマルセイユの後背地であるラングドック地方を考察の対象とし、諸地域の多様な経済活動と、穀物流通における貿易商人の活動を通して、食糧問題の特質や、市場と政治の関係を把握することを試みる。

はじめに、大西洋貿易が発展するなかで、地中海側に位置するラングドックの港の活動がどのように変化したのか説明する。16世紀以降、海上商業の中心は地中海から大西洋に移っていく。しかし、世界貿易港ボルドーとマルセイユの間に位置し、後背地の役割を果たすラングドック地方の港は、大西洋の世界市場と地中海のレヴァント市場とつなぐられ、地方の経済成長を促す。

次に、ラングドック地方の経済構造は、世界経済と関わることでいかに再編成されたのか検討する。ラングドック地方は輸出品の供給地となり、毛織物・絹織物産業が、王権の保護だけではなく、地域の手工業者の努力によっても発展する。その一方で、「新大陸」からの新しい農産物の導入を契機に、オ・ラングドックに穀倉地帯が形成され、穀物が不足する地域に余剰を提供できるようになる。これにより、穀物栽培に適さない地中海側は葡萄栽培に力を入れられるようになる。

最後に、穀物取引市場の動向とそこでの商人の役割を検討することで、穀物流通の実態に迫る。王国の一大穀倉地帯を形成するラングドック地方では、地域住民の食糧供給だけではなく、地方外へ穀物を移出するために、穀物市場ネットワークが再編成される。これらの市場間の穀物流通を担う貿易商人は、様々な貿易障壁や統制があるなかでも、穀物自給率の低い地域への日常的な供給や、不作時の臨時的供給を行い、各地の食糧不足の解消に寄与する。

以上のことから、南フランスとアメリカ植民地では、大西洋規模での分業が進む一方で、一部の地域では基礎食糧を貿易に依存するようになったこと、穀物商人は食糧供給に不可欠な役割を果たしていたがゆえに、穀物貿易は諸権力と関わりながら進められたことを示す。

【学習院大学史学会概要】

名称 学習院大学史学会 (Historical Society of Gakushuin University)
所在地 (事務局) 〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1
学習院大学文学部史学科研究室内
E-mail : hist-soc@gakushuin.ac.jp
代表者 (2019年度) 亀長 洋子 (学習院大学文学部史学科教授)
設立 昭和38年(1963)11月

創設経緯・沿革

学習院大学史学会は、学習院大学文学部史学科創設の3年目を機に、史学科と表裏一体の関係を保ちつつも、独自の研究、その他の活動を行う組織として設立された。この学会は、1963年初めから準備され、同年11月16日の創立総会に発足した。1965年1月には、学会誌『学習院史学』を創刊し、「掲載されたものが、それぞれに意義を持ち、将来の研究に資するものであること」(創刊の辞)を目指した。

目的

日本の歴史学の発展に寄与すること(『学習院史学』創刊の辞)
歴史学の研究ならびに会員相互の親睦をはかること(会則)

会員数

全国 計 1,138名
教員・事務室 12名 学内会員 426名 学外会員 700名 (2017年6月現在)

集会

大会・総会(1回/年)、例会

刊行物

学習院史学 GAKUSHUIN HISTORICAL REVIEW (1回/年)
史学会会報 GAKUSHUIN HISTORICAL REPORT (2回/年)

『学習院史学』第 58 号原稿募集のお知らせ

次号 58 号（2020 年 3 月発行予定）への投稿原稿をお待ちしております。

※2019 年度の投稿要旨の提出期限は 2019 年 7 月 20 日（金）、投稿原稿の提出期限は 9 月 下旬（具体的な期日は要旨審査後に通知）とさせていただきます。